下富坂丁家守　利右衛門　同丁家守　三郎兵衛　同丁七郎右衛門店　半九郎　同丁六郎兵衛店　佐兵衛　同丁家守　清兵衛　上富坂丁久右衛門店　又七
小石川仲丁家持　十右衛門　淺草八軒丁半右衛門店　源右衛門

合八人

〔天保十一年武鑑〕御小鳥類

伏見丁（さくらだ）　濱松屋善藏　本郷一丁メ　越前屋彦四郎

〔雍州府志六土產〕鵁鶄（アヲサギ）○中略　凡生捉之謂落鳥、又謂執之、入籠而畜之謂飼鳥、於山林原野捉之、則以手殺之謂縮（シムル）、又謂野縮、縮取命根之謂也、

〔常陸風土記久慈郡〕郡東七里太田郷、○中略　東大山謂加毗禮之高峯、卽有天神、名稱立速日男命、○中略　神祟甚嚴、○中略　凡諸鳥經過者、盡急飛避、無當峯上、自古然、爲今亦同之、

〔日本紀略平城〕大同二年三月庚戌、群鳥數千翔鳴空中、

〔續日本後紀十七仁明〕承和十四年閏三月戊寅、群鳥億萬、繞日上下、自日中到黃昏、仰看空中、不知何鳥、是月數々有群鳥、遲明自西方度東方、其夕覆天終始不見、訪諸故老、皆云、未曾聞之者、

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年四月十三日丙辰、是日夜分有鳥、无萬數飛鳴於大極殿上、

〔安齋隨筆前編九〕一古今三鳥傳　古今集三鳥傳はよぶこ鳥、いなおほせ鳥、玄なが鳥の三と云、春上よみ人しらず　をちこちのたつきも玄らぬ山中におぼつかなくもよぶこ鳥かな　秋の上よみ人しらず　我かどにいなおほせ鳥のなくなへにけさふく風にかりはきにけり、玄なが鳥は古今の歌には見へず、拾遺集神樂歌にあり、古今三鳥の傳と云は誤也、古今には二鳥也、一說にも、ちどりを入て三鳥也、古今も、ちとりあり、○中略　古今榮雅集に、古今三鳥の一也とあり、吳竹抄にも傳受ある鳥のよし見へたり、

〔新撰字鏡鳥〕鵠（佐支、又豆留、）

〔倭名類聚抄十八羽族名〕鶴　四聲字苑云、鶴何各反、和名豆留、似鵠長喙高脚者也、唐韻云、鶴音雹、楊氏抄一多豆、今按倭俗謂鶴爲葦

鳥雜載

鶴名稱